



2025 年度
第 21 号

体育市民連帯 ニュースレター

1
お前が勉強で
大学に行けるのか？
その言葉
人権侵害です



2
スキー国家代表出身の
弁護士です
どうやって二つとも
やったかというと



3
ソウル市学校施設開放
予算中断論議
〔社説〕
市民体育権の脅威



4
「セクハラ懲戒論議」
射撃有望株
後輩への嫌がらせ
8 ヶ月間の資格停止処分



5
聞慶市
A コーチの暴言論議
スポーツ運営委を
16 日緊急招集



大韓民国スポーツの

根本的变化を

皆さんと共に

作って行きたいです

体育市民連帯と共に

していただけますか？



*

01 キム・ヒョンス 体育市民連帯執行委員長 2025. 06. 15

「お前が勉強で大学に行けるのか？」その言葉、人権侵害です



“すべての学生選手は選手である前に学生だ”

国家人権委員会がスポーツ人権ガイドラインに提示した文章だ。憲法第31条は「すべての国民は能力により均等に教育を受ける権利を持つ」と明示する。これを教育権といい、児童も当然含まれる。また、憲法は国民

が教育から疎外されることがないように義務教育を定めており、教育基本法第8条でこれを「6年の初等教育と3年の中等教育」に具体化した。

したがって「選手である以前に学生」であるすべての児童の教育権は法により人権で保障されなければならない基本権中の基本権だ。これを守らない場合、基本権の侵害であり、人権侵害、そして児童虐待と見る余地は十分だ。

学生選手も同じだ。人権委はすでに、彼らの学習権がすべての児童の学習権と変わらないことを明らかにした。国際的にもIOC（国際オリンピック委員会）、UNICEF（国連児童基金）などが児童の過度なスポーツ没入を止め、バランスの取れた成長を図ることを関連指針として勧告している。

にもかかわらず、韓国社会では過去のやり方をそのまま固守するエリート体育集団が健在だ。彼らは「現場」と「特殊性」を理由に「学業よりは運動」という認識をそのまま継続しようとしている。しかし、それには韓国社会が耐えなければならない被害があまりにも大きく、その理由もなくなった時代に入っている。

あらゆる「例外」にまみれた学生選手の生活

過去から学生選手は授業時間に眠ることが一度や二度ではなかった。先生たちも彼らの疲れた人生に対する理解なのか、無視なのか、起こさなかったりした。すでに教育現場で「例外」的だった彼らの人生は明らかに一般学生とは異なり、この「違い」は学生選手があらゆる「例外」に慣れた人生を生きるようにした。

学校別・種目別・年齢別の差はあるだろうが、多くの場合、一日24時間の中で明け方・午後・夕方に続く訓練時間は毎日7時間に達する。また、すべての生徒と同じように7時間程度の正規学校の授業時間があるが、これさえも抜ける場合がある。食事・個人整備・課題など生活に必須な4～5時間を除けば大体6時間程度が残るが、まさにこの時が完全な休息ができる就寝時間だ。一日二日このように過ごすなら分らないが、このような生活の繰り返しは疲労を累積させ、授業時間がまもなく就寝時間になる。

このような学生選手の人生で学業は負担になるだけだ。どうせ運動で何かを成し遂げようとするところに学業も、眠りを覚ます先生も、学習権保護のための政策も妨害物と認識されるだけだ。食べて、寝て、運動することが毎日繰り返される人生、そして彼らはそのような存在と認識する社会が彼らの「例外」を作り出した。

2019年人権委学生選手全数調査で運動-学業並行の必要性を尋ねる質問に多数の学生が「学業と運動の並行が必要だ」と答えた。反面、中学生23.0%、高校生34.9%は「必要ない」と答えた。その理由としては

「身体的に疲れる」(39.8%/34.9%)、「運動と訓練の妨害」(27.3%/31.7%)を挙げた。学業が彼らの人生に役立つことは知っているが、当面の課題である入試と就職にはあまり役に立たないという認識と見られる。

学業が疎かになる雰囲気は、学生選手が所属する運動部でさらに固着化している。学業を並行しようとする学生選手に「その時間に運動を加えなさい」、「チームを考えない」、「勉強で大学に行けるのか」などの打撲が生じざるを得ない構造が作られ、指導者の要求と保護者の欲望が触れながら運動部には学業が決して重要ではないという「教訓」が内面化される。

1970年代から学校体育の力量は「国威宣揚」が目的の「夢の木発掘」に集中した。学生選手と一般学生の区別なく誰もが多様なスポーツ活動に参加し、技量が優秀な学生・チームは学校を、地域を、ひいては国家を代表する選手に成長させるピラミッド模型が必要だったが、残念ながらこのようなモデル構築には時間がかかるため、「現場」では効率性に焦点を合わせるようになった。いわゆる「運動する学生」と「違う学生」を選別し、運動する学生を目的に合わせて集中的に育成する「ひょうたん型モデル」が定着したのだ。

「選別」された学生選手の前には入門段階から青い葉と赤い葉が差し出された。運動を選択すれば他の道は「折る」ことだという暗黙的な決心をしてから「運動部」の一員になれたのだ。運動部の一員になった以上、国家と社会のための個人の犠牲は避けられなかった。すべての時間と力量を運動だけに集中してこそ成果が出るという「1万時間の法則」のようなファンタジーが彼らが言う「現場」に根付き始めた。

数多くの「例外」が学生選手の権利を奪う

このような流れの中で学校体育を復元しようとする意識のある現場教師が増え、2000年代に入って現場教師と体育学研究者を中心に学校運動部、ひいては学校体育の正常化が必要だという声が具体的に出始めた。学習権問題など運動部で発生する多様な類型の人権侵害は長い間「故人」運動部文化に起因するだけに、「現場改革」が主要課題として浮上した。これまで運動部の学習権剥奪が国威宣揚のために避けられないと認識していた国家と社会、そして学校体育現場の亀裂も同時に生じた。

2006年頃、人権委の「学生運動選手人権状況実態調査」を基点に政府と政界でも学校体育正常化のための努力に乗り出す。07年、国会では安ミンソク議員ら11人が「学園体育正常化のための要求決議案」を出した。政府は2008年「勉強しながら運動する学生選手像確立のための学院体育正常化方案」を模索し▲正規授業履修義務化▲最低学力制導入などを検討した。2012年「学校体育振興法」が制定され、最低学力制をはじめとする学生選手の学習権保護が法で規定されるに至る。

しかし、現場の慣性は決して侮れなかった。学生選手の学習権を積極的に保護しながらは体育人が地上最大の目標と考える「国威宣揚」を達成できないということだった。彼らは学生選手の学習権保護には同意するが、現場の「特殊性」を尊重しなければならないという理由で数多くの例外を作り出し、学習権保護政策を無力化させ始めた。

教育部の「欠席認定許容日数」という例外措置で初等学校から「公式的な」授業欠損を許した。最低学力制は2024年施行を控えて一部保護者たちの反発で事実上無力化されてしまった。さらに、最近当選した柳承敏大韓体育会長は、保護者懇談会を通じて欠席認定許容日数の拡大、最低学力制の廃止に加え、合宿所の復活まで宣言し、学校体育を1970年代に回帰させようとしている。学習権は、学業を語ることも、続けることも、勧めることもできないようにする彼らだけの例外の中で、窒息している。

一部では「運動も勉強だ」、「勉強が嫌いで運動を選択したのは自己決定権であり幸福追求権」と主張する。「勉強は後日必要な時にすれば良い」として基礎学力の必要性を全く認識できない主張、「学業-運動の並行はスポーツの国家競争力を弱体化させる」として学業自体を無力化する主張、「スポーツはそれ自体で専門領域」として非人権・非教育的慣行をそのまま貫徹させようとする主張も依然として存在する。彼らのこのような試みが結局、人権の指向点である「普遍性」に全く符合しない結果を作り続けている局面だ。

学生選手が学業についていけない本当の理由

学生選手の学習権保護など学校体育の正常化のためには▲競争一辺倒の少年体育大会の教育的変身▲学校運動部とスポーツクラブの再概念化▲自発的参加を導くインフラとプログラム▲知徳体を等しく評価する入試制度▲際立った素質または疎外・排除される危機にある学生選手対象（教育的）例外などが必要だ。現在、サッカーや野球などを除いたほとんどの種目は全国大会に集中する構造であり、学生選手が長期欠席をせざるを得ない状況を作る。また、文化体育観光部、教育部、大韓体育会、種目団体など体育に関与する所管省庁と機関が多く、大会が無分別に開催されるという問題もある。大会開催日程で学生の学習権保護が最優先考慮事項ではなく、貸館、大会間の日程、協会の事情などが前の席を占めているため、欠席がいつも起きるしかない。

しかも、欠席が日常茶飯事的环境中では、学生選手が学業についていけなくなり、早期に学業をあきらめる問題も作り出す。実際、2019年人権委の調査では未来のために学業と運動を並行しようとする学生選手の本当の苦衷がまさにこの地点にあることを確認した。

最低学力制の無力化の動きは「学生選手も学業が必要だ」と認識する教師と指導者の努力まで萎縮させている。学習権を守ろうとする指導者は学校管理者と保護者の欲望とぶつかり「不必要な」ことに気を使う人と評価される苦衷が発生する。また、何とか学生選手を長く「引き止めて」いる指導者が「熱心にする」と評価される現場は、訓練の効率性という科学的・合理的認識を萎縮させる結果を招いている。学生選手の非人権的な時間割もそのような中で生まれるものであり、合宿所復活という時間に逆らう主張も同じだ。

したがって学習権を保障するための政策を立てる時は、すでに人権委が勧告したように義務教育期間である小・中学校の場合は学業-運動が並行できるよう誘導し底辺拡大に傍点を打たなければならない。自分の進路を探索する高校からは最低学力制を廃止するものの、学業に必要な生徒の補充学習を実効的に提供する必要がある。例えば、長期間国際競技に参加する学生選手は、教師が同行して学業を逃さないようにするなど、積極的な補充学習案が必要だという意味だ。

一方、義務教育期間の授業を抜けない原則が現場に定着すれば、出席認定欠席許容日数のような反憲法的な措置と共に同一専攻進学措置などのように職業選択の自由を侵害する措置もまた共に廃止されうるし、学校長の裁量の中で個人の発展を図る機会も用意されるだろう。

合宿訓練の場合は、合宿所が人権侵害的な環境の温床という指摘によって常時合宿訓練を禁止する学校体育振興法上の規制を継続するものの、教育的に成果を成し遂げるための短期合宿には制限された期間を置いて管理すれば、教育的成果と競技力という二兎を得ることができると見る。

スポーツ改革は多くの当事者の利害関係が絡んだ戦場のようだ。特に、国がスポーツを眺める観点がどうかによって、行方が分かれることになる。人権委が学生選手の人権保護のための方便を出し、最も重点を置いた部分は、まさに国家の首班である大統領がスポーツパラダイムを転換しろということだった。

人権が保護され、教育的目的が達成され、皆が幸せな中でスポーツに参加できる国家的な環境構築は、国家がスポーツを眺める認識の大転換から始まることができる。誰一人疎外されない環境構築、新しい政府の鮮明な視線を期待する。

出典：

https://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0003137385&CMPT_CD=P0010&utm_source=naver&utm_medium=newsearch&utm_campaign=naver_news

02 ソ・ジョンファ 民主社会のための弁護士会文化芸術スポーツ委員会所属弁護士 2025. 06. 14 スキー国家代表出身の弁護士です、どうやって二つともやったかというと



私は学生運動選手出身だ。高校1年生の時、モーグルスキー国家代表に選ばれたが、中間テストを受けるために国家代表資格を放棄するという覚書を提出しなければならなかった。この経験は私に深い疑問を残した。「運動と勉強は共にできないのか?」、「なぜ一つだけ選択しなければ

ならないのか?」この質問は運動選手としての進路だけでなく教育制度全般に対する悩みにつながった。その後、再び国家代表になって五輪に出場した。2010年バンクーバーから2018年平昌まで3回連続太極マークをつけて出場した。そして同時にアメリカの大学に進学した。そこで運動選手はすなわち「学生」であり、勉強する学生は誰でも運動に挑戦できる構造の中にいた。選手引退後は国内ロースクールに進学し、スポーツ人権専門弁護士の道を歩んでいる。

私が国家代表をあきらめた時期から10年余りが経った今、韓国社会は依然として「選手か、学生か」を選択しなければならない雰囲気だ。その結果、運動が好きだった多くの子供たちが幼い頃から夢をあきらめるようになり、エリートスポーツの道を歩く選手は勉強とは距離が遠くなるようになる問題が繰り返されている。

なぜエリートスポーツが衰退するのか

今日、韓国のスポーツ界は危機に直面している。特にエリートスポーツ分野では幼少年選手数が着実に減少しており、中・高等学校段階で運動を持続する学生さえ減っている。同時に一般学生のスポーツ活動時間も依然として不足している状況だ。

これに対して教育界、体育界、保護者、政策立案者全員が「エリートスポーツと一般学生のスポーツ参加に対する根本的変化が必要だ」という認識には共感している。

だが、その「変化」が何でなければならないかについては合意が不足している。一方ではエリート選手減少の原因を学業負担や進路不安定のせいにし、短期的な誘引策や施設拡充だけを議論する。また、運動も勉強だとして憲法上認められない「運動権」（授業に参加せずに運動を思う存分できるようにしてほしいという権利）を憲法第31条の教育を受ける権利に対抗する概念として提示する。

このような過程で、一般学生のスポーツ参加拡大に対する具体的な議論は抜けている。結局、エリートスポーツと学校体育が分離された構造の中で、両方が本来の機能を果たせずにいるのだ。

最も大きな問題は体育特技者制度を含むエリートスポーツ育成方式が「選択の強要」に基づいているという点だ。学生は「運動をするためには勉強をあきらめなければならない」、あるいは「勉強するためには

運動をあきらめなければならない」という現実の前で二分法的選択を強要される。このような制度では、運動に才能と興味があっても、大部分の学生はより安定的な進路である勉強を選ぶしかない。

したがって、運動と勉強を並行できる柔軟な構造への転換が必要だ。今のように少数を早期選抜して集中訓練させる方式から抜け出し、すべての学生がいつでもエリートスポーツに挑戦できるように道を開かなければならない。勉強と運動の並行が可能で、多様な水準で選手とチームが共存して競争できなければならない。

このような環境が整う時、学生は「二つのうち一つを選択する」のではなく「二つともできる」道の上で進路を設計することができる。これは単なる政策変更ではなく、スポーツに対する認識と制度の根本的転換を意味する。

スポーツが日常になる社会

このような構造的変化は施設の拡充、生活体育の活性化とも密接に関連している。多くの人々が韓国にはスポーツ施設が不足していると指摘するが、問題は単なるインフラの量ではない。施設があってもそれを利用する人がいなければ維持できない。結局、供給を拡大するためには十分な需要が必要であり、需要は「スポーツを日常的に楽しむ人々」から出てくる。

2024 国民生活体育調査によれば「最近 1 年間の参加経験がある体育活動」と回答者の 41.2%が「ウォーキング」と答えた。続いて登山 15%、フィットネス 11.5%、ランニング 6.8%の順だった。これは多様なスポーツ種目に対する接近性と経験が制限されていることを示している。

反面、米国は野球、バスケットボール、サッカーなど種目別クラブとリーグが全国的に存在し、誰もが一定水準までは簡単に参加できる環境を提供する。多様な種目が活性化されてこそ施設拡充要求も説得力を得て、民間資本であれ国家財源であれ投資誘致が可能だ。

施設と需要は「鶏が先か、卵が先か」の問題と見られる。しかし、現実的には両方とも並行して育てなければならない。スポーツを日常化し、多様な種目の参加人口を増やし、同時に施設と制度を拡充する立体的な努力が必要だ。

私たちは今、AI 時代を生きている。技術は労働に取って代わり、生産性を引き上げ、人間の余暇時間を拡大している。週 4 日制の議論も活発に行われている。ところが、AI が代替できないことが一つある。まさに「人間の身体活動」だ。スポーツは人間の体を直接動かしてこそ可能な活動であり、協力・競争・感情・没入が共存する複合的な人間活動だ。

したがって、スポーツは今後さらに重要になるだろう。増加した余暇時間をどのように使うかという質問に、スポーツは身体的・精神的健康を同時に充足させることができる解答になる。共同体の中で一緒に走り、笑い、競争しながら葛藤を減らし、共感を形成するこの力は AI が提供できない人間だけの資産だ。エリートスポーツはこれ以上少数の特権になってはならない。すべての学生が挑戦できる構造、誰もが楽しめる環境の中で真のエリートスポーツが蘇る。そして、それはすなわち私たちの社会全体の健康につながる。私たちはこれ以上「運動か、勉強か」を尋ねるのではなく、「なぜ子供たちに両方できる機会を与えなかったのか」を問い直さなければならない。

運動はそれ自体が人間の生活の一部であり、学校はその運動を止めないように助ける所でなければならない。これからは構造を変えなければならない。選択を強要する制度から可能性を開いてくれる制度へ。そうすればエリートスポーツは再び蘇り、学生たちは自分の道を主体的に歩むことができるだろう。

出典 https://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0003138265

03 ブリッジ経済 2025. 06. 16

ソウル市学校施設開放予算中断論議・・・[社説] 市民体育権の脅威



ソウル市議会教育委員会の崔ジェラン議員がソウル市の学校施設開放インセンティブ予算中断を強く批判し、インセンティブ予算復元を促した。

チェ議員はソウル市が教育庁の助けを受けて不足した生活体育施設問題を解決してきたが、今になって責任を回避していると指摘した。

12日に開かれた第331回ソウル市議会定例会第3回本会議で、崔ジェラン議員は、ソウル市が2017年から2020年まで毎年30億ウォンずつ編成していた学校開放インセンティブ予算を2023年から全額中断したことに對して批判した。

崔議員は「学校施設の開放はソウル市が教育庁に要請した政策であり、市民の体育活動権利のためのもの」とし、「ソウル市が予算を中断したことは市民の信頼を裏切るもの」と話した。

崔議員は上溪洞ソウルオウリム体育センターの事例を言及し、「770億ウォンの事業費と4年の工事期間が所要された体育センターの代わりに学校運動場と体育館開放が市民体育需要を解決できる現実的な方案」と強調した。

ソウル市生涯教育局長は教育庁の財政余裕とソウル市の財政赤字などを理由に事業方向を調整したと答えたが、崔議員は「運営費支援性格のインセンティブと施設補修は性格が違う」と反論した。

オ・セフンソウル市長は「学校施設開放は市民体育権保障のための重要な事業」とし、「教育庁と協議して予算と政策方向を点検する」と答えた。しかし崔議員は「検討だけでなく実質的な予算反映が必要だ」として「今回の補正予算にインセンティブ予算を必ず復元しなければならない」と強調した。

崔議員はまた「ヌルボム学校のように施設は学校が提供し運営は地方自治体が引き受ける構造で学校施設開放も長期的に再編しなければならない」と提案した。

これに對しチョン・グンシク教育監は「崔議員が敏感な懸案を提起してくれてありがたい」と答えた。

崔ジェラン議員は学校施設開放問題解決のために条例案改正案を発議し通過させるなど積極的な議政活動を展開している。学校施設の開放は市民の権利であり公共の責任であり、地方自治体と教育庁が協力して実効性のある政策に導かなければならないという点で、今回の議論は重要な意味を持つ。

出典：<https://www.vival100.com/article/20250616500962>

04 トップスターニュース 2025. 06. 11

セクハラ懲戒論議・・・射撃有望株、後輩への嫌がらせ→8ヵ月間の資格停止処分



沈黙さえ重かった。意欲的に入学した新入射撃部員に注がれたいじめとセクハラ、そして結局運動場を離れなければならなかった被害者の退場はまた別の傷を残した。一時「未来の星」と呼ばれた先輩選手は自身が作った影の前で懲戒を受けた。

ソウル所在のH高校の射撃部で、同性の後輩に対するいじめやセクハラの容疑で、射撃有望株が8ヵ月間、資格停止処分を受けた。

該当事件は2024年、ソウルH高校の射撃部で発生した。

被害者のB君は2023年春に新しく入学した1年生で、射撃部2年生の先輩A君に持続的ないじめと身体接触を強要されたと伝えられた。

特に昨年5月の大会期間中、訓練場と合宿所で身体に水をかけるなどB君に対して上着を脱衣したまま身体接触をし、この姿が携帯電話で撮影された事実も明らかになった。

映像の中ではB君が「いつまで撮るのか」と撮影を止めてほしいと要請したが、事情は受け入れられなかった。

その後、精神的苦痛を訴えていたB君は射撃を中止し、学校も移した。

2023年7月、ソウル市射撃連盟は申告を受け付けた後、スポーツ倫理センターの審議を通じて事件を調査した。

A君は「後輩が愚かで面倒を見るためにいたずらをした」として親しみの表現だったと主張した。

反面、B君は「普段から悪口と一方的ないじめが繰り返され、先輩が身体接触後『こういう行動をすれば競技力が上がる』とまで言ったことがある」と対抗した。

スポーツ倫理センターは4月、A君に8ヶ月の資格停止処分を下した。

ソウル市射撃連盟は決定文で「被害者が羞恥心を感じており、強要・身体接触などは先輩・後輩関係優位を利用した身体的・精神的苦痛に該当すると判断する」と明らかにした。

一部の委員はさらに強力な懲戒の必要性を主張したが、A君がまだ価値観が完全に形成されていない点が参酌され、懲戒の程度が決定された。

これに対してA君と家族はソウル市体育会に再審を要請し、裁判所に懲戒効力停止仮処分申請と本案訴訟まで提起した状況だ。

A君側は、第三者の通報だったことやB君の転校事由、後輩の射撃実力向上に役立ったことなどを挙げ、懲戒の不当性を主張している。

反面、B君は「いじめとセクハラがあったという事実自体が変わらない」として裁判所に懲戒維持を促している。

ソウル市射撃連盟とスポーツ倫理センターは、今回の事件をきっかけに選手の人権保護対策づくりにさらに重きを置いている。

今後の懲戒再審および裁判所の判決結果により、学校スポーツ現場の人権保護システムにも少なからぬ影響が予想される。

出典：<https://www.topstarnews.net/news/articleView.html?idxno=15693150>

聞慶市、A コーチの暴言論議、スポーツ運営委を 16 日緊急招集



聞慶市庁ソフトテニス実業チームの A コーチが選手たちに暴言<本紙 2025 年 9 月 9 日付 5 面>をした事実が知らされ論難が広がっている。これに対し聞慶市は 16 日、スポーツ運営委員会を緊急招集し、該当事案に対する真相把握と懲戒可否を審議する予定だ。

該当コーチは 5 月 3 日から 10 日まで聞慶国際ソフトテニス場で開かれた「第 103 回東亜日報旗全国ソフトテニス大会」期間中、選手たちに「X 足の奴、X みたいだね」等の悪口と卑下性発言をしたと知られた。このような発言に選手たちは大きな羞恥心と衝撃を受け、競技力の低下につながり、相次ぐ敗北まで重なり、チームの雰囲気は急激に崩れた。一部の選手の間では「試合よりコーチの顔色を伺う」という吐露が出ており、チーム移籍や運動放棄まで考慮する人もいると伝えられた。

聞慶市庁ソフトテニス実業チームを経て行ったある選手は「A コーチの暴言はかなり前から続き、体罰も激しかった」として「このためにチーム移籍や運動放棄まで悩む先輩・後輩選手が多かった」と明らかにした。

論難が大きくなるや聞慶市スポーツ運営委員会は 9 日、実業チーム所属選手たちと個別面談調査を進行し、16 日に開かれる会議を通じて最終的な懲戒可否を決める方針だ。

運営委関係者は「選手たちの陳述を土台に事実関係を綿密に確認した」とし、「スポーツ運営委員会で厳正な審議を経て責任ある措置を下す」と明らかにした。

聞慶市は今回の事案を単純な個人逸脱と見ずに、実業チーム指導者管理体系全般の弱点を表わした事例と判断している。市関係者は「すべての選手が尊重される環境で運動できるよう指導者人事および評価制度を全面的に強化する計画」とし、「再発防止のための制度的整備に着手する」と伝えた。

一方、聞慶市はスポーツ人権保護次元で指導者対象人格教育定例化、選手心理相談導入、匿名苦情受付チャンネル用意などを検討中だと知らされた。

出典：<https://www.dkilbo.com/news/articleView.html?idxno=500472>

06 週間スポーツニュース

槐山初の公共プール「槐山バンダビ国民体育センター」が来月 1 日に開館

<https://www.news1.kr/local/sejong-chungbuk/5814507>

大韓体育会、「2025 年優秀選手スマートスタートプログラム」本格運営

<https://www.starnewskorea.com/stview.php?no=2025061616100840638>

体育公団、夏季に備えたオリンピック公園の安全点検を推進

<https://isplus.com/article/view/isp202506160145>

世宗市議会、職員採用関連障害者体育会監査院監査請求

<https://www.yna.co.kr/view/AKR20250616089700063?input=1195m>

国民体育センター開館 10 年記念…南海郡、小さな音楽会を開く

https://www.news1.com/view/NISX20250616_0003214758

盈徳で開かれた第 30 回慶尚北道知事旗生活体育サッカー大会の成功

<https://sports.donga.com/region/article/all/20250616/131814557/1>

山火事克服の信号弾… 第 21 回盈徳海辺全国マラソン大会修了

<https://view.asiae.co.kr/article/2025061612330702979>

第 77 回忠南道民体育大会、熱い歓声の中で幕を下ろす

<https://daily.hankooki.com/news/articleView.html?idxno=1229783>

「共にしてより輝く」第 4 回全国オウリム生活体育大祭典盛況終了

<https://www.xportsnews.com/article/2014603>

体育市民連帯オンライン 定期後援案内

万人が楽しむスポーツ世界、体育市民連帯が共に作ります。

私達連帯の活動に積極的に賛同していただくことを願います。

私たち体育市民連帯は体育人の権益保護と
福祉実現のために努力しています。
皆さんの小さな心づかいがより良い世界のための
体育市民連帯活動に強固な土台となります。
体育市民連帯会員として力になろうと
される方は下の口座に後援お願いします。

国民銀行 086601-04-095940

口座名義：体育市民連帯

オンライン定期後援は下のリンクを通じてホームページからできます。

多くの関心をお願いします。

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 孝寧路 230 スンジョンビル 407 号

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com

週刊ニュースレターバックナンバー（資料室） <http://www.yg.jpn.org/sportscm/index.html>